

に近い語形を表記したと思われるものがみえる。命令形の *ku:* が *ku* に変化していて、接続形のキテのテの部分が口蓋化し、過去形のキタリにおいては語頭が口蓋化して脱落している。これらから推測するに、おもろ時代より少し新しい形になっていたと考えられる。

現代首里方言をあげると、

(i) 未然形	連用形	条件形	命令形
<i>ku:</i>	<i>tʃi:</i>	<i>ku:wa</i>	<i>ku:</i>
		<i>ku:riwa</i>	
		<i>ku:re:</i>	
(ii) 終止形	連体形	接続形	過去形
<i>tʃu:n</i>	<i>tʃu:ru</i>	<i>ttʃi</i>	<i>tʃan</i>
	<i>tʃu:</i>		

である。*tʃu:* は *tʃu:ʃi* (来るもの) という下略形にあたるものである。終止形はキヤリ系がなく、キラム系である。

結局、おもろ時代のカ変動詞「来る」の活用について、その特徴をあげると、

- (1) 連用形のキが口蓋化して、*tʃi* となっていた。
- (2) 未然形と命令形は「こう」であり、*o* 母音をとどめ、まだ *ku:* になっていなかった。

(3) 条件形として、「ば」が未然形にも已然形にも接続して、二形をもっていた。現代方言では「ば」が *wa* になっている。

(4) 終止形として派生形のキヤリ (来居り) が用いられ、まだ継続の意を表していた。現代方言ではキヤリ系がなく、キラム (来居ム) にあたる *tʃon* だけである。

(5) 派生形キヤリが活用して第二次派生語をつくるが、連体形はキヤルにあたる「きよる」と、「きよ」を用いる。現代方言の *tʃu:ru* と *tʃu:* にあたる。

(6) 本来の連体形クルにあたる形が「くるやに」(来る様に) の中で用いられている。この形は現代方言では見られない。

(7) 接続形のキテにあたる形は、テの部分が口蓋化して、*kitʃe* となっていた。現代方言は口蓋化が深化して *ttʃi* となっている。

などである。

本論は、「琉球語のカ変動詞「来る」の活用——その分布と歴史——」(『人文学報』昭和61年度) と関連して執筆したものである。参照されたい。

古文問題の出題について

——ある入試問題を例として——

川 嶋 秀 之

小稿では、最近瞥見した高校入試問題のうちからひとつの試験問題を取り上げ、問題の出題の仕方に関するさまざまな問題点を考えてみたい。

まず、以下に某県の県立高校で出題された古文の入試問題を掲げる。ひとつ腕だめしに解いてみられたい。

次の文章を読んで、下の(一)～(三)の問いに答えよ。

*1 白河院の御時、九重(くわい)の塔(マツ)の金物を、牛の皮にて(金属の飾り物)

作れりといふ事世(こと)に聞こえて、修理(しゆり)したる人、

*2 定綱朝臣(さだつなのみこと)、事(こと)にあふべき由(よし)聞こえたり。仏師(ぶつし)な(勤せられるであろうということが)

にがしといふ者を召して、「たしかにまこと空(くう)とを見て、ありのままに奏(まう)せよ」と仰せられけ(申しあげよ)

れば、承りて上りけるを、なからのほどより帰(かへ)(まん中)

り降りて、涙を流して、色を失ひて、「身のあれ(身が無事である)

ばこそ君にも仕へ奉(たてまつ)れ。肝心(かんしん)失せて、黒白(くろはく)見え(真偽が)

分(わか)くべき心地(こころ)も待(まち)らず」と言ひもやらずわなな

きけり。君きこしめして、笑はせ給(たま)ひて、こと(お聞きになって)(格別)

なる沙汰（ご処置も）もあらで止みにけり。かの韋仲將（かみしんじょう）が、

凌雲台（りょううんたい）に上りけむ心地も、かくやありけむと覚（このようであつたらうか）

ゆ。時の人、いみじきをこのためしにいひける（当時の） （たいそうなおろか者の例）

を、顕隆卿（あきりゅうけい）聞きて、「こやつは、かならず冥加（みやが）ある（神仏の助け）

べき者なり。人の罪蒙（つみまう）るべき事の罪を知りて、（人が罪を受けるようになる）

みづからをこの者となれる、やむごとなき思（やむごとなき思慮）ひ

はかりなり。」とぞほめられける。まことに久し

く君に仕へ奉りて、事なかりけり。

※1 白河院＝十一世紀末の天皇。讓位の後、院政を始めた。

※2 定綱朝臣＝藤原経家の子。

※3 仏師＝仏像や仏具を造る人。

※4 かの韋仲將が、凌雲台に上りけむ心地＝中国の韋仲將が、魏の明帝の作った、目もくらもほどの高い建物に上らされて字を書いたときに、頭髪が白くなるほど恐しさを感じたということ。

※5 顕隆卿＝藤原為房の子。

(一) 空ごとの意味を五字以内の口語で書け。

(二) をこの者となれる、とあるが、だれが「この者」となったのか。次の1～4の中から適当な人物を選んで、その番号を書け。

- 1 定綱朝臣
- 2 仏師にながし
- 3 韋仲將
- 4 顕隆卿

(三) 上の文章で、話の中心になっているのはどういうことか。次の1～4の中から最も適当なものを選んで、その番号を書け。

- 1 おく病であったので、長年、主君に仕えられたこと。
- 2 度量が大きかったので、当時の人々から慕われたこと。
- 3 慎重に対処して、他人や自分の危機を救ったこと。
- 4 信心深く人助けを心がけて、善行を積んだこと。

（原文は縦書き。「朝日新聞」1986年3月

13日付による）

さて、上記の問題を読まれていかが思われたであろうか。中学校で古文の初歩的知識しか習っていない高校受験者に出題された問題にしては、ずいぶん難しい問題だと思われるのではないだろうか。何度か読み返さないとなかなか読み解けない部分が多い。

この難しさは、ひとつには問題文自体の難しさによるものであるが、ひとつには出題の仕方、すなわち読解の補助手段として問題文の傍に加えられた口語訳や後に付された注解にもあるように思う。もちろん、それらが不要だということではなく、中学校を終えたばかりの受験者たちにとって、それらが適切に配慮されてなされているかどうかということにある。私見によれば、この問題文の口語訳と注解には、受験者が中学校を終えたばかりの者であるということとを考慮にいたした場合に、いささか適切を欠くのではないかと感ぜられる個所がいくつかあるように見受けられる。以下それらを見ていきたい。

まず、口語訳の方から見ると、大部分はわかりやすくてよいのであるが、二三指摘するならば、「黒白」に付された（真偽が）の訳は、後に続く動詞との関連からいえば（真偽を）としたいところである。これでは「見分く」でなく「見え分く」であることのニュアンスが失なわれるというならば、「見え分く」までひっくりめ、（真偽の見分けがつか）としたらどうであろう。ともかく、現在は使われていない「見え分く」という動詞も含めた形で口語訳が付されていたら、もっと分かりやすいであろう。また、「身のあればこそ」に付された（身が無事であるからこそ）の（身）も、（身体）とした方が現代語として自然であろうし、「なから」に付された（まん中）というのは、厳密にいえば接尾語「ら」の意味を生かし（中ごろ）とした方がよりふさわしいと思われる。

次に、口語訳も注解もないが、何らかの注記があったらと思われる個所について述べよう。ひとつは「……牛の皮にて作れりといふ事世に聞こえて、修理したる人、定綱朝臣、事にあふべき由聞こえたり」というところで、「修理したる人」と「定綱朝臣」との関係がわかりにくくなっている。ここは、「修理したる人」と「定綱朝臣」とがななのか、「修理したる人」が「定綱朝臣」をななのか、「修理したる人」である「定綱朝臣」なのか、三通りの可能性があって、一読したぐらいではなかなか判別しがたいであろう。ここには、ぜひとも「修理したる人」＝「定綱朝臣」であることの注記が欲しい。冒頭にあるところだけに、この関係が把握ができない

と、後の読解が困難になる。もちろん、この関係を隠すことによってこそ設問(三)が存在理由をもつとも見ることができようが、受験者の学力を考えた場合には注記が必要であると私は思う。もうひとつは、「たしかにまこと空ごとを見て、ありのままに奏せよ」という個所の「たしかに」で、現代語の「たしかに」とここで用いられている「たしかに」には、意味的に差違があるため「しっかりと」ぐらいの口語訳は必要であろう。

問題文の後に加えられた注解については、さらに問題点があるように思う。※2 定綱朝臣＝藤原経家の子、※5 顕隆卿＝藤原為房の子という注解があるが、これらはほとんど無意味なのではないだろうか。博識な国文学者ならともかく、受験生のだれが、藤原経家や藤原為房を知っているというのだろう。このような注解はまったく読解のための補助となっているとは考えられない。受験者の学力を無視したものと非難されてもしかたないのではあるまいか。また、※4 かの章仲将が……の注解も不要と思われる。これは問題文とのからみで言えることであるが、問題文の「かの章仲将が……と覚ゆ」の一文は作者の感想を述べたものであって、他の文とは異質であり、文章全体の流れからは不要のものである。思い切って、この一文と注解とを削除した方が、文章の流れもすっきりして受験生を混乱させないであろう。そうすれば五つの注解のうち三つは必要なくなる。

最後に、設問の不備と思われることについても言及しておこう。設問(三)で、正解は3の「慎重に対処して、他人や自分の危機を救ったこと」であろうが、「慎重に対処して」というのは正鵠を射たとらえ方とはいえない。この問題文の出典は「十訓抄」であるが、その巻十「可庶機才能・芸業事」に収められており、仏師なにかしの臨機応変の才能を主題としている。したがって、ここは「慎重に対処して」ではなく、「機転をきかして」とした方が主題に添ったとらえ方になる。これは文章中からも読みとれるものであり、「君聞こしめして、笑わせ給ひて……」というところから十分にうかがうことができる。正しく読み解いた受験生がいたら、半分はずれているので選択に迷うことがあるのではないだろうか。

以上、ひとつの問題を例にとりいろいろと述べてきたが、古文の入試問題を見渡してみても感じるのは、受験生の学力をあまり考慮しないで出題されているのが多いのではないか、ということである。もう少し受験生の側に立った、配慮ある出題がなされることが望ましいと思う。

的はずれの妄言が多かったことと思う。御寛容を乞う次第である。

(東京都立大学大学院学生)